

図書 紹介

科学の困ったウラ事情

著者：有田正規(国立遺伝学研究所)

発行：(株)岩波書店／〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5／電話 03-5210-4000／

B6判／120頁／価格 1,200円(税別)／2016年2月24日発行

本書は、著者が2010～2014年に「科学」(岩波書店)の科学通信欄コラムに年4回ほど不定期に掲載された「はみだし生命科学」の内容をまとめ直したもので、次の5つのセクションより成っている。研究不正、論文誌・学会の商業化、成果主義、オーサーシップ、競争的資金、教育と研究のバランスなど科学研究が抱える問題点について思いが述べられている。

- I 危機に瀕する科学
- II 科学者というシゴト
- III 学術論文という制度
- IV 不正はなぜ起きるのか
- V 社会における科学のあり方

以下、セクションを見ていくと、Iは、1 基礎科学はこれでよいのか、2 天職からシゴトになった科学で、成果重視による疲れ、シゴト化する科学等についてである。

IIは、3 研究の影に隠れる大学院教育、4 商業化される国際会議—失われゆくソサイエティ、5 研究者のベーシック・インカム、6 研究のマル査で、教授の職務は教育か研究か、今の大学院には基礎教育が必須、会議という名のショービジネス・パッケージ旅行、企業化する生命科学、徒弟制度を悪用するボスたち、戦前と変わらない学術界、若手の意見を反映させるベーシック・インカム、インターネット時代における学会の役割、ボス研究者が握る地位と権力等についてである。

IIIは、7 学術研究というビジネスの裏側、8 論文数はどれほど重要か—置き去りにされる質、9 知識の1パーセント則、10 ハイエナ学術出版、11 ライブラリ化する大学図書館の未来、12 オープンサイエンスを誰が支えるのかで、オープンアクセスというビジネスモデル、個人の処理能力を超える情報量、インターネットが変える論文の質、オープンアクセスの功罪、論文の質を保つ努力、論文を量産したがる研究者、信用できない研究成果、消滅しかねないオープンアクセス出版物、理系に大学図書館は不要か、情報の維持・管理コストは高い等についてである。

IVは、13 不適切なオーサーシップ、14 信用を傷つける「メガホン科学」、15 腐ったり
ンゴは落ちるか、16 研究不正とその対策で、不適切なオーサーシップ、名誉著者、ゴース
ト著者、最近の研究はニュース性が勝負、不正研究は規制強化では防げない、見抜ける捏
造は氷山の一角、トップダウン研究が助長する組織的不正、研究ノートは踏み絵ではない、
研究不正の原因は評価体制の歪み、組織におこなわれる不正:でもボスは安泰、対策案その
I:ペナルティ取引制度、対策案そのII:学会による資格認定制度等についてである。

Vは、17 老後の初心忘るべからず、18 評価経済社会、19 技術化する科学、20 社会のため
の、個人の科学で、ブッシュ・パラダイムは成立しない、無駄にみえる研究と研究費の
無駄遣いの違い、科学の技術化もトップダウン体制の利点と欠点等についてである。

各頁の脚注には、補足説明があり、そのほか用語解説には、インパクト・ファクター(IF)、
オープンアクセス法、科学研究費(科研費)、大学法人化、大学ランキング、ポスドク、ポ
スドク1万人計画についての記載がある。

競争とは無縁だった学問の世界が、科学技術の振興が国家政策となり、近年「商業主義
化」し、大学の運営費が減少し、その代わりに競争的資金の増加として現れている。研究
者は、具体的な成果を上げるため追い立てられ、その結果の一つが研究不正であるという。
そのひとつ「不適切なオーサーシップ」は、論文の「著者」は本来、研究発案から成果発
表まで一連の過程に関わる存在と国際的基準で定められているが、掲載確率を上げること
などを目的に、研究室のボスや共同研究者を「空著者」とする慣習が「見かけ上の多作研
究者を生んでいる」と指摘している。また、STAP細胞事件も研究者の倫理の問題のみが取
り上げられたが、研究者たちの過酷な競争の行き過ぎが招いたことではなかったかと述べ
ている。

研究者なら誰でもここに書いてある事情を知りつつ、日々の研究を行っていることであ
ろうが、この流れを変えることはなかなかできないのが現状なのだろう。

本書は、現在の科学界に対する問題提起とその対応策が分かり易く述べられており、会
員諸氏も一読を希望する次第である。(学会事務局)